

○岩国市徴古館所蔵文書

四二 毛利元就書状写

御上書

「山田平三左衛門尉殿 元就」

(因幡) (南条)

去月十二日、於鹿野麓、宗勝被遂合戦候、悉皆以御方御行御粉骨被得大利候、誠無比類候、感悦之至更難謝候、連々可令褒美候、為後証感状如件、

(一五六四)

永祿七年八月二日 元就御判

(重直)

山田平三左衛門尉殿

四三 毛利輝元書状写

(最)

(南条)

御方之儀取前以來別而御入魂之儀候、九州表宗勝同前御辛勞之儀は不及申上国候て、其表無緩御短息之故、早速静謐候事大慶候、殊去年八橋在番之儀、元春被申候处、于今被相届候、寔祝着候、仍太刀一腰進之候、表慶儀候、将亦、草薙・後藤事、此方一味候、某元方角

(宗勝力)

之儀候条「」可被副御心之由、申入候、旁以可被成其心事所仰候、猶小寺佐渡守可申候、恐々謹言、

(元龜三)

閏正月廿二日

輝元花押

山田出雲守殿

御宿所

四四 吉川元春起請文写

如承候、福山次郎左衛門尉共事、内々逆心も風聞候、殊去年之儀証拠歴然之儀候条、旁并其許御年寄衆一兩人呼申彼子細申談候処、有御分別、則御方於宅所無異儀被申付候、御懇意難謝候、其節者元統其外御家中衆御無届之様被存候て、乍去彼方此方と被仰談候者自然漏聞被仕損候へハ無曲被存、上着翌日則時二被討果候事無余儀候、於我等本望此事候、如仰御方之儀、先年元就別而被申談御馳走之儀、於輝元・隆景、我等無忘却候、自今以後之儀、猶以可有御入魂之由、肝要候、此方之儀も為何儀候共、見放不申、副心可申旨、然上は、無二三世上轉變之儀候共、可預御届候、於拙者も聊不可有疎意候、若此旨於偽者可罷蒙

(熊野社牛王)

日本国中大小神祇、当国巖嶋両大明神・杵築大明神・大山権現、別而氏神祇園牛頭天王・八幡大菩薩・天満大自在天神御罰者也、仍神文如件、

(一五七六)

天正四年十一月廿五日 元春御判

(重直)

山田出雲守殿

四五 毛利輝元書狀写

御上書 (重直)

山田出雲守殿

毛利

輝元

寔御方之儀、元就以來別而預御入魂候、殊雲州嶋根陣之時「」御馳走之段令承知、於我等「」其筋目向後弥可被相届「」元春并渡辺承候、本望之至候「」之儀も如前々猶以無疎意可申談候、此等之趣若偽候者、日本国中大小神祇、殊当国鎮守嚴島兩大明神・氏神祇園牛頭天王可有照覽候、聊無別儀候、猶元春可被申候、恐々謹言、

(一五七六)

天正四

十二月十八日

輝元御判

山田出雲守殿

四六 吉川元春書状写

返々因州之趣、具被仰越本望候、弥相替儀候ハ、
可被仰越候込、明後日打廻候間、不及申候く、

(紙)

御折帑拝聞候、如仰今度広瀬落去付而因州之儀上衆打
出、少々相動候歟、就夫、鬼城・私部儀至鳥取被相咨

(宮部)

候段不及是非候、然間、木下小一郎・善乗坊為頭、但

(取)

州被相催三四千にて、令乱入候歟、鳥執之儀用心候而
人数不被差出候故、彼山下加路辺まで発向候而、于今

(因幡)

敵私部・舟岡二居陣之由申候哉、左候故為其手合、南
条事氣多郡表取出、彼方角放火候て、今程青屋迄打入

(取)

之由、被仰越候趣具承知候、鳥執之儀、豊国無二ノ以
覚悟、此方入魂儀候、先以肝要候、我等事、此口隙明
候之条、明後日至其表令陣替候、左様候て、先舟手二
て鳥執・鹿野へ可加勢儀定候、雖不及申候、此節之
儀、旁御氣遣可為本望候込、其元打越事候条、彼是可
申談候間、不能一二候、恐々謹言、

(天正八年)

駿河守

五月廿三日

元春御判

山田出雲守殿

御返報

四七 吉川元長書状写

羽衣石谷決叟寺、昨夜御手之衆被相動、北垣五郎次郎
方敵被討捕、頭御持せ候、御心懸之段申も疎候、殊切
捨歷々被仕之由候、誠無比類候、被疵之衆雖有之淺手
之由候条、可然存候、猶以使者可令申之条、令省略候、
恐々謹言、

治部少輔

五月五日

元長花押影

山田出雲守殿

御陣所